

「サポーター制度」 導入レポート

2025年4月からスタートしたサポーター制度。1泊2日で新潟県の介護施設を視察した様子と、開始から約1か月が経過した今の状況をお聞きました!早くも11名の方にご参加いただき、走り出しは上々。その一方で、今後の課題も見えてきたようです。

悠優かしま居宅介護支援事業所
マネージャー

やま した しん や
山下 真也さん

サポーター制度の概要

既存職員の負担を軽減し、 労働環境改善を目指す

常勤やパート職員とは異なり、2時間だけのスポットで業務に従事していただける仕組みが「サポーター制度」です。2024年11月、すでにこちらの制度を導入している新潟県の施設を視察させていただきました。理事長と一緒に学んできました。

最も大きな導入目的は職員の負担軽減です。業務の中には、掃除やシーツ交換、入浴後のドライヤー、レクリエーションなど、専門技術を必要としないものもいくつかあります。そういった作業を切り分け、サポーターの方にお手伝いいただくことで、職員が各種介助に一層注力できるのではないかと考えました。また1日2時間であれば、週5日の雇用でも法定福利費がかかりません。私たちは人件費を節約でき、職員の皆さんは負担が減り、スキマ時間で働きたい方にはスポットのお仕事を提供できる。まさにメリットしかない制度というわけです。



サポーターの業務内容と現在の状況

幅広い年代の方々が活躍中!

業務は食事のアシストを行うイトサポ、入浴のアシストをするバスサポ、シーツ交換などを行うリビングサポ、レクリエーションなどを担当するコミュニティサポの4種類。介護福祉士の資格をお持ちの方には、主にバスを担当していただいています。現在の採用人数は悠優かしまが4名、悠優みふねが7名の計11名。40～70代まで幅広い年代の方が参加してくださっており、11名中8名が女性です。雇用形態は非常勤職員。勤務する2時間をどこに設定するかは、サポーターの皆さんがご自身の都合に合わせて、自由に選ぶことができます。また、頻度は週3日程度の方が多い印象です。



既存職員との関わり方

イトサポに関しては事故に繋がる可能性があるため、基本的には職員も立ち会います。しかし、その他は最初に1～2回職員が付き、以降はお任せしています。

今後の課題

サポーターの人数をいかに増やしていくか

サポーター制度の導入から約1か月が経過しました。チラシを用いた募集活動では、応募人数が当初の想定を下回る結果となりました。現在、働いている方は11名で、その内訳は、リファラル採用が5名、チラシ経由の応募が5名、また、新たな試みとして実施した嘉島町の新興住宅地へのポスティングによる採用が1名です。今後は、より効果的な告知方法を継続して検討するとともに、若い世代など幅広い世代の方々にも関心を持っていただけるよう、近隣の高校や大学への働きかけも強化していく予定です。



みんなの家
マネージャー
もう り たすく
毛利 翼さん

新潟の施設視察について

魅力的な制度

昨年11月に視察に行ったのは、新潟県の「太陽メディケアサービス」という会社が運営する施設。すでにサポーター制度を導入済みとのことで、サポーターの皆様がどのような役割を担っているのか、参考にしたいと考えていました。

まず驚いたのは、仕事が細分化されていたこと。食事の介助やお血洗い、トイレ介助、送迎などもすべて介護士で正職員の役目だと思い込んでいた私にとって、まさに目から鱗が落ちる思いでした。介助だけではなく、お風呂やレクリエーションなどのサポートもしてもらっているとのこと。例えば、朝食・昼食の時間帯の2時間、サポーターさんが入ってくれたら、その間に職員が一斉に休憩できたり、午後から手厚い介護ができるようになったり……。非常に魅力的だと感じました。



働くサポーターさんの属性

学生さんや主婦の方などフルタイムで働くことが難しい方々が、それぞれのスキマ時間を利用して働いているそうです。週1回の方もいれば、週4回の方も。「介護」という仕事だと身構えてしまう方も、「サポーター」なら「自分にもできそう」だと感じるのではないのでしょうか。



新潟の視察を終えて感じたこと

制度導入にあたって

今回の視察を終え、職員の皆さんには「仕事の切り分け」の必要性を伝えました。どこが忙しく負担が大きいのか、サポーターさんには何を願うべきか、必要な人員の見極めが重要になると感じています。



社会福祉法人千寿会とは異なる点

サポーター制度を活用することで、常勤職員は他の業務へ一層注力できるようになります。その結果、利用者様のために時間を有効に活用し、職員の業務における無理や無駄を削減できると考えています。この制度の導入は、利用者様、そして私たち職員の双方にとってメリットになるでしょう。

サポーター制度の今後の展望

地域貢献とスキルアップ

美里地区は人口も少なく、仕事も限られています。このような地域で私たちがサポーターさんを募集すれば、地元に雇用の機会を提供し、地域貢献にもつながると考えています。今はとにかく、このような働き方があることを多くの方に知っていただくため、広報活動に力を入れています。サポーターさんに力を借りることができれば、常勤の職員たちは身体介護や認知症の方の介護などの専門性の高い業務に専念しつつ、スキルアップも目指せるはず。そして何より、利用者様に快適にお過ごしいただくため、より手厚い介護ができるようにしていきます。



私の支えとなった 温かな絆と特別な瞬間

千寿会で18年のキャリアを積む松村さん。周囲からの支えや心に刻まれたエピソードを通じ、人との絆の大切さを改めて実感する松村さんの声をお届けします



千寿会で長く働く理由

休暇の取りやすさなど福利厚生充実

職員のことを考えてくれていると感じる瞬間が多くあります。例えば、有給休暇を確保できることや、家庭の事情で急にお休みを取得することができる点です。年間8日取れるメモリアル休暇もあり、誕生日や結婚記念日など特別な日を楽しむことができます。この制度は、すべての職員が対象で、申請時には上席が調整を行ってくださるため、気軽に申請することが可能です。

また近年、国が処遇改善を進めていることもあり、給与面も良い方向へ進んでいると実感しています。

職場の人間関係の良さ

職員の皆さんは非常に温かい人たちで、利用者様とご家族様も素晴らしい方々です。利用者様から「話しやすい」と言っていたことが多く、私にとって大きな励みになっています。



「支えられた」と感じたエピソード

小さなスペースから生まれる大きな安心感

私は1人で抱え込む傾向があり、特に行事の段取りに悩むことが多いのですが、周囲の職員が協力してくれることがとても助けとなっています。皆さん、「これはこうしたらどう?」と相談しながら支えてくれます。私自身も助けを求めるよう努力していますが、周りの人たちが察して声をかけてくれることも多く、本当に感謝しています。

「サテライトみんなの家」は小さなスペースで運営されており、職員や利用者様の顔が見えやすく、互いを気かけやすい環境です。狭い空間だからこそ、自然と表情が見え、周囲の人々が助けを感じ取ることができるのではないのでしょうか。私自身は心配性で考え込むことが多いのですが、「大丈夫」「どうかなるよ」といった励ましの言葉をもらって、心が軽くなります。また、「やってみなっせ」という法人のコンセプトも、私にとって大きな支えとなっています。

忘れられない「特別な1日」のエピソード

信頼の絆から生まれた、忘れられない一言

ある利用者様から「松村さんがいれば大丈夫」と言っていたことがあります。この言葉は、送迎のときに自然に出たもの。お迎えの際、その方が「行ってきます」と声をかけ、続けて「色々心配していることもあるけれど、あなたがいるなら大丈夫」と言ってくださいました。普段の何気ない会話の中での一言ですが、心に深く残るものでした。長いお付き合いによる信頼関係が築かれていたからこそ、この言葉をいただけたのだと思います。

職員の皆さんへのメッセージ

日々直面する様々な状況で「どうかなるから大丈夫」という気持ちを大切にしてください。慌ただしい場面に直面すると、つい焦ってしまうことがありますが、そのようなときに周囲から「大丈夫だよ」と声をかけられると、本当に心強く感じます。以前、仲間たちから励ましを受けた私だからこそ、今度は同じような状況の仲間に「どうかなるから大丈夫だよ」と声をかけたいと思っています。

おすすめ映画のご紹介

忙しい日々の中で、ふと心を動かされる瞬間。それは1本の映画との出会いから生まれることがあります。ここでは岡本さん、上野さんのおすすめ作品をご紹介します。何歳になっても挑戦し続ける勇気や、命の尊厳など、皆さんも大切な気づきを得られるかもしれません。

おすすめ映画

『マイ・インターン』

アン・ハサウェイさんの作品が好きで、中でも一番好きな映画です。あらすじを読んで、ぜひ観たいと思いました。

グループホームひだまり
おかもとひとみ
岡本 仁美さん

👍 おすすめポイント 前向きな気持ちをくれる作品

年齢に関係なく、新しいことに挑戦し続ける主人公の姿です。舞台のニューヨークの景観と同じくらい、素敵だと思いました。過去の経験を活かし、職場の仲間と成長していくストーリーも魅力的です。これから新しいことにチャレンジしようと思っている方におすすめします。ぜひ観てください。



おすすめ映画

『遺体 明日への十日間』

2024年西田敏行さんが亡くなられ、遺作の1つとして紹介された映画です。すぐに関心を持って観ました。題材は2011年に起きた東日本大震災です。福島県出身の西田さんは遺体安置所の職員を演じました。突然の災害で奪われた、命に関わる人々の想いが描かれています。

グループホームひだまり
うえのふみ
上野 富美さん

👍 おすすめポイント 人生最後の瞬間への思い

西田さんが次々と安置所に運ばれる遺体に寄り添うシーンです。硬くなった体をマッサージしたり、化粧を施したり。子どもの遺体には親のように話しかけ、臨月だった妊婦さんの遺体には苦しみの涙を流します。心身ともに疲れ切った職員への「死体ではない。遺体です」という言葉も印象的でした。命は絶たれても、尊厳を持って接しなければならないことを思い出させてくれる映画です。今まで介護職員として何人もの死と直面してきた私も、その気持ちの大切さを改めて実感しました。医療現場、介護の現場、命に関わる仕事をしている方々にぜひ観ていただきたい作品です。



西田さんが寄り添うシーン

